

石崎奉燈祭について

—石崎の奉燈祭の現状と未来について—



田中 選秀

聞き手・干場七姫 宮本菜央 (石川県立七尾東雲高等学校2年)

奉燈の整列

自己紹介

私は、昭和11年2月11日生まれで、妻と息子夫婦の4人で暮らしています。

石崎の祭りには五穀豊穡を願う春と秋にする祭りと、大漁を願う奉燈祭が夏にある。奉燈祭は子供の頃から参加しており、4才ぐらいには奉燈の模型を作って担ぐことをして遊んでいました。

石崎町について

町は7つに区切られていて、まだ石崎村とよばれていた当時、7軒家があるから七軒町会、しらすぎ町会、中町とか7つの町会があったそうなんです。そのまま伝わって今の町名が付き、西1区、西2区、西3区(※)、東1区、東2区、東3区、東4区の7つに区切ったようです。戦中の昭和18、

19年、私が国民学校の小学1、2年の頃は、町会毎にグループを組んで登校をしていました。高学年の上級生が引率して下級生がついて行き、そのようにして集団行動を習慣付けていたのだと思います。その時には、学童は色分けになっていました。どんな風に分けたかは、わからないが紫隊とか緑隊とか色の隊名で呼ばれていて列を組んでいたのを記憶しています。その時の色が今日まで引き継いで奉燈を担ぐときの色になっています。学校の運動会をするときもその色でしていました。

※西3区…新しくできた区割りです。奉燈もありますが祭礼当日は、堂の前には並ばず、前夜祭として和倉温泉駅前で行を行っています。

奉燈祭の由来

大人になって聞いたが、奉燈(※1)は能登一円にあるが、石崎では漁師のひとが網すき(※2)をしていました。その

ひと達が奥能登の珠洲に出稼ぎに行っていた頃、祭りに奉燈があった。それを石崎に取り入れてはどうかという事になって始まったと言い伝えがあります。その言い伝えを確かめるため、珠洲に関係者が行って、いつ頃誰が石崎に奉燈を譲ったか記録がないか調査をしたが、お互いわからないもの同士なのでわからなかったようです。

漁師は今でこそ機械の船で外浦や石崎以外の湾でも魚を捕っているが、昔は手漕ぎのろ^{かい}で漁をしていた。その頃は、石崎、祖浜など集落毎に漁場が線で区切られていたようです。これでは漁場が狭いから魚も少なく稼ぎも少ない。何とかよそにも行けるようしてもらいたいと殿様に頼んだそうです。そしたら、石崎は漁師力もあるから漁のできる範囲を広げようと殿様が許可をしたそうなんです。そのため、この地域に漁場が広がったようです。お上の許可を得たので殿様に魚介類を献上しました。その献上した魚介類は、なまこ、あかにし、なまこの腸などの珍味だったという記録が残っています。これは仮説ですが、殿様を招待することになり、通るところを全部に灯りを付けた。御輿はあるが、その時、奉燈を持ってきて灯りを付け、足下を照らし殿様を案内したのが奉燈祭の始まりでないかという話があります。その話をするとある町の歴史家から、昔の家は火災の起きやすい構造の家で石崎では火災を多く出した経緯がある、そのことを鎮めるために奉燈祭りが始まったとの言い伝えがある、と反論がでるんだ。実際に、殿様に魚介類を献上したと言う文献も、火災のあった時期や燃えた戸数の文献もあるので、どの説が本当かわからないのが現実です。

(※1) 奉燈…石崎ではキリコのことをこのように読んでいます。

(※2) 網すき…網を修理する職人の事

奉燈について

各町内には、大小の奉燈（キリコ）が一基ずつあり、それには絵と文字が描かれています。絵と文字の関連はないと思うが、絵は勇ましい武者姿が描かれています。昔は、七尾に2人ほど描く人がいて、その人が何種類かのサンプルを持っていて、支部長などの役員が、今回はこの絵を描いてほしいと注文をして描いてもらっていた。ところが、今では友禅作家や普通の画家が描いているため、優しい絵になってアニメのような絵になっているところもある。また古い昔の絵を引き継いでいるところもあり、2～3種類の絵を支部長や役員好みで決めているようです。文字も昔からのものを引き継いでおり、2通りくらい持っているところもあるようです。文字は、「魚満浦」「志欲静」「智仁勇」など海に関する文言が使われ、五穀豊穰など農作業に関するものは使っていない。



(上) 八幡神社「石崎町の神社」(下) 石崎町東1区の奉燈（キリコ）

大きさについては、昔の奉燈はこんなに大きくなかった。それが、少しずつ少しずつ大きくなっていったようです。高さは11～12mが標準と言っているが、広場に休ませた時、自分の町会より大きいものを見ると、「修理するときは向こうよりも少し大きくしよう」と思っていた。そのころは、奉燈祭が終わると、奉燈を解体してばらばらにしてそれを神社の軒下やお寺の軒下などに仮置きをして、次の祭りにはそれを組み立てる、そんなことを繰り返しているため3～4年でガタガタになって壊れてしまう。その時に修理を兼ねてサ



奉燈の乱舞

イズを大きくしていった。だけど、最近は、しょっちゅう作り直しをすると、財政が続くもんでないので何とかしなならんと言うことで、市も協力をしてきて格納庫を八幡神社の境内で作ってもらったんです。それで、7本いっせいに組み立てなくてもいい組んだまま倒して奉納してある。祭りが来ると、台車で引っ張り出して最小限の組立で終わるもんだから、新規に組み立てることも少なく、壊れて修理することも少ないということで、奉燈の大きさを訂正することなく重いまま担がなければならない。それが難儀なんだ。今は12mでそろっているけど、これは、最盛期の時代で人口もいる青年団もいる時のサイズであったから何とか担いでこれたが、今人口が少なく高齢化が進み青年団も減ったので、小さくする話が出ている。ところが、1基作るのに大きな負担になる

ので、昔のまま無理をして担いでいる。それだけに担ぎ手の確保が、奉燈を出している町の悩みでもある。人口の減少、高齢化、若者が減った事で、時間の短縮とか日程の変更や、1年おきにするか、などの意見が出ています。また大きさも昔は大きい奉燈が喜ばれていたが、今は人口の多い町会はいが小さい町は機会があれば小さいのにしたいと思っている。

準備

今は、ある程度組み立てたまま格納をしてあるため、装飾品を作るのにだいたい1ヶ月くらいかけて準備をします。紙を使った装飾などは、毎年破れるので張り替えます。支部

長の家などで10人ぐらい集まって、飲み食いしながら夜なべをして楽しんでやっているよ。祭りの近くになるとみんなで手伝い、人数も多くなる。それと奉燈の上に5~6人の子供が笛や鉦、そういう鳴り物をするため乗っているんだが、男子が少なくなったんで4~5年前ぐらいから女子が乗っている町会もある。女人禁止となっていたもんだけどそんなこと言てられない。出来る人を乗せないといけないと言っている。

役員などは、1年で変わるけどへとへとになる。自分の番にはちゃんと奉燈が動いてくれるか、あるいは、人々が応援してくれるのか1番気になる。幸い今のところ、元気のいい支部長が東京や大阪などで仕事をしていても「祭りには帰って来ますよ」といって、支部長を務めています。今年も京都にいる人が支部長をした。来年は横浜にいる人がすることになっている。ほかの役員が段取りをして祭りの準備をするもんだから支部長がいなくても出来ているんだ。担ぐのは、富来町では、女性が担いでいるみたいだが石崎は、男性だけになっていて女性は入れていないし、今後もないだろうな。

奉燈祭の実際

祭りの見所は、堂の前広場での奉燈の乱舞だろうな。堂の前というのは、神社境内の集まりの場を言い、海の所までが参道です。その1部に広場があり、そこを利用して御輿を置いて、その周りに奉燈を並べたり、乱舞をします。以前は、6基全部が乱舞していたときもありました。そんなときは、喧嘩もあったし、奉燈の壊しあいもあった。だけど、今は、けがもするし奉燈も壊れると言うことで、広場を使用する数を1基か2基に制限しているが、勇壮に乱舞する時間帯は、見る者も、担ぐ者も盛り上がります。夜には、奉燈に明かりがついて幻想的になります。それが1番の見所だと思う。それと、その場所だけでなく、東と西に分けて移動をして祭りをしないかとなって、東から西まで6基全部が1列になって表通りを回っている。全部の町を賑々しく回るために豪勢な祭りになる。何年前かに町を2つに分け、別々に移動しないかという意見を出したが、青年団が、それではみっともないという事で全町を回る方になった。したがって、時間もかかり終了するのが朝の3時か4時になっていた。けがもするし体力も持たないしな。また、担ぎ手が少ないと心配になるので、青年団が、職場などの人々を頼んで何とか格好を付け担ぐことが出来ていた。各町内ともそろって動いていたと思う。昔は、祭りが終わった次の日に解体して軽くなったものを再び担いで町内を練り歩いたこともあったが、現在は格納庫に入れるのがめいっぱいである。



担ぎ出し

今後の状況

今は、少子高齢化にともなって青年団も減ってきている。そんな中、奉燈の大きさは変わっていないのが現状です。そこで、昔の運営法にこだわらず、大きさや担ぐ距離などを状況に応じた努力に合わすとか、小さくする事などいつかやらんといかんと思う。昨年まで奉賛会会長をしていて、現状の人で出来るようにしてほしいと言っていたが、若い人が拒否をしている。車を付けるか、などの話もするが若い衆もプライドがあるのか、「それは石崎の奉燈ではできない」ということでやってない。いずれ縮小と言うことをしないとけないと思っている。あるいは、本数を4本に減らすとか2町を1つにするとかの考えもあるが、それでは消えるであろうとする町会は抵抗がある。小さくできないのであれば、それを立てておくだけの祭りでもいいのか、という意見まで出ている。今は、若い衆が拒否をしているが、このままではできんがになると危惧をしています。日本の遺産と言っているが能登のキリコと捉えているため、石崎が1つなくなっても、観光として寂しくなるが県全体としてはさほどたいした問題でもないと思う。小さくするとか本数を減らすとか何かを考えないと。小さくするにしても金がかかるしな。しかし、今後のことを、石崎の人がどう考えるかが大事だと思う。

回想

私から祭りを取ったら何も無い。小さい頃から祭りが大好きだったし勉強より祭りに力を入れていたな。学校へ行っても勉強の話じゃなく祭りの話を多くしていた。

この家には、伝説があります。何代かの前の人が漁師をしていた頃、網に石が引っ掛かったので石を捨てた。再び漁をしたら、また、その石が網に引っ掛かってしまった。そこで、この石は神のお告げではないかといって、祀ったところ漁に

恵まれた。石崎の祭りの機縁は、この田中の家であると言って、この石を神社の御神体にしようということになった。その石が神社に今もある。そして、祭りになると、田中家が東地区にあるため、ここから回らないと御輿も奉燈も回らなくなるという言い伝えがあり、東地区から回ることが今でも続いている。堂の前に御輿があるのは、堂そのものが神社という意味がある。そして、神社の前は、境内が狭いので回れないから、神社の参道の広場を祭りの場所にして利用している。祭りの時に、御神体が神社にあったらだめなので、祭りをするために御神体を1度御輿に移し、御輿を神社に見立ててその周りを回る。御輿とは神社そのもので、神社を持って歩くことが出来ないから、御神体を宮司が御輿に移して、それを持って移動する訳である。春秋の祭りの時にはそれを持って回っているが、奉燈の場合は、御輿の周りを乱舞するため壊れないようにやぐらに御輿を入れて終わったら神社に戻しています。

奉燈祭の時には、家を開け放して宴を持ちます。その時の御馳走は、この季節に石崎で採れるエビが出ます。シャコ・カニ類なども出され、海で採れたものが多い。石崎では漁をして採れたものを売りに行くのがお母さんです。お母さんが里に行って売ってくる。そこで、良く買ってくれるお客さんを一年に一度家を明るくして招待するのが伝統となって、世話になった方々や親戚、遊び友達を呼んだりする伝統が今も続いている。

【取材日：2015年8月7日・9月30日】

PROFILE

田中 選秀 たなか せんしゅう

昭和11年2月11日・80歳
石崎奉燈祭奉賛会顧問

会社役員などを務める傍ら、七尾市及び石川県の公民館館長や公民館連合会役員を歴任。昭和55年より石崎奉燈祭奉賛会の実行委員長を17年、会長を15年6ヶ月務め、平成24年9月より顧問。奉燈祭の伝承に尽力している。



● 取材を終えての感想 ●

私は、里山里海の研修をしてみて、いろんな事を学ぶ事ができました。私達は「石崎奉燈祭」について調べました。私は「石崎奉燈祭」を見たことがあったので、里山里海を通して更に詳しく調べる事ができてすごく楽しかったです。「石崎奉燈祭」は日本遺産になっており見物客は地元の人だけでなく、他県などからたくさんが来るほどとても有名で、迫力があって見応えのある祭だと思います。奉燈を準備する人やその奉燈を担いでいる多くの人達の一生懸命さや楽しさが見ている側にも伝わってくるので、私は、とても楽しい気持ちになります。「石崎奉燈祭」は、東一区から東四区と西一区から西三区に分かれていて、区によって奉燈に描かれている絵が違い、担ぐ人がはいているパンツの色も区によって違ってきます。そういう工夫がとてもわかりやすいと思うのでいいと思いました。私は、「石崎奉燈祭」について知っていた事や知らなかった事などをより詳しく知ることができとても良かったです。これから「石崎奉燈祭」を見るときは田中さんに聞いた事を頭に入れて楽しみながらみたいです。

(干場七姫 写真：左)

私は、里山里海の研修でたくさんの方のことを学びました。私たちは「石崎奉燈祭」について調べました。私は、祭りは好きではなく「石崎奉燈祭」に1回も行った事がないため、祭りはあまり詳しくありませんでした。したがって「石崎奉燈祭」について調べるのは、あまり乗り気ではありませんでした。しかし、田中選秀さんに祭りについて様子や伝統なども教え頂き徐々に、祭りに興味を持ちました。そして、この研修で初めて「祭りは楽しい！行きたい！」と思えることができました。これも、私たちに「石崎奉燈祭」の魅力を教えてくれた、田中選秀さんのおかげだと思います。私は、田中さんから、祭りに参加する人数が減っていることを知りました。私たちのような若い世代が昔から受け継がれる祭りや文化などの伝統を継承していき後世に伝えるべきだと思います。したがって、このような取り組みには積極的に参加し自分の人生にプラスにしていけたらいいなと思いました。(宮本菜央 写真：右)

